

各関係機関の長 殿

福岡県病虫害防除所長

平成15年度病虫害発生予報第4号について

このことについて、以下のとおり送付します。

平成15年度病虫害発生予報第4号（7月）

【普通作物】

作物名	病虫害名	発生現況 (平成比)	発生予想 (平成比)
早期水稲	いもち病（穂いもち） 紋枯病	- -	少ない 並
普通期水稲	いもち病（葉いもち） 萎縮病 ツマグロヨコバイ 縞葉枯病 ヒメトビウンカ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ	- - 並 - 並 並 - -	少ない やや少ない 並 やや多い 並 並 並 並

【普通作物 - 早期水稲】

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平成より少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、葉いもちの発病株率は0.4%（平成：1.8%、前年：0%）であった。発生ほ場率は9.1%（平成：17.3%、前年：0%）であった。

イ 気象予報では7月の平均気温、降水量及び日照時間は平成並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今年の出穂期は平成より5日程度早くなる（詳細は平成15年6月20日発表の福岡県米麦大豆生産改善速報第4号を参照）と予想されている。

イ 防除を実施する場合には、薬剤の剤型によって防除適期が異なるため、粉剤は出穂期直前、粒剤は出穂前処理であり、種類によって使用時期が

異なるので注意する。

ウ 防除薬剤については「平成15年度普通作物病害虫防除基準」を参照する（以下の病害虫についても同様）。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病は認められなかった。（平年の発病株率：0.3%、前年：0.1%）

イ 気象予報では7月の平均気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂以降は紋枯病に対する感受性が高まり、気温の上昇に伴い病斑が上位葉へと進展する。

イ 今年の出穂期は平年より5日程度早くなる（詳細は平成15年6月20日発表の福岡県米麦大豆生産改善速報第4号を参照）と予想されている。

ウ 防除を実施する場合には、薬剤の剤型によって防除適期が異なるため、粉剤は出穂期直前、粒剤は出穂前処理であり、種類によって使用時期が異なるので注意する。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年より少なく・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病は認められなかった。（前9か年の平均発病株率：1.0%、前年：0.1%）

イ 気象予報では7月の平均気温、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 補植用の置き苗は葉いもちの伝染源になりやすいので、早めに処分する。

イ 葉いもちに対する薬剤の効果は発生初期ほど防除効果が高いので、防除を実施する場合は、発生に注意し早期防除に努める。

2 萎縮病（ツマグロヨコバイ）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病は認められなかった。

イ ツマグロヨコバイの10株当たり成幼虫数は平均0.2頭（平年：0.2頭、前年：0.5頭）であった。

ウ エライザ法による検定の結果、イネ萎縮ウイルス保毒虫率は0%（平年：0.8%、前年：0.1%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

本病を対象とした防除の必要はない。

3 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年よりやや多い
- (2) 予報の根拠
ア 6月5半旬調査の結果、発病は認められなかった。
イ ヒメトビウンカの10株当たり成幼虫数は平均0.4頭(平年：0.2頭、前年：0.6頭)であった。
ウ エライザ法による検定の結果、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は4.6%(平年：0.4%、前年：1.2%)であった。
- (3) 防除上注意すべき事項
箱施薬を実施していないほ場で、本虫の発生が多い場合には防除を実施する。

4 セジロウンカ

- (1) 予報の内容
ア 発生時期：平年・前年並
イ 発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 筑後市の予察灯で6月12日に初飛来を確認し(平年：6月6日、前年：6月11日)、その後県内各地の予察灯及びネットトラップで6月13日～14日、22日～26日に飛来を確認した。
イ 6月5半旬調査の結果、セジロウンカの10株当たり成幼虫数は平均0.6頭(平年：0.8頭、前年：0.1頭)であった。
ウ 気象予報では7月の平均気温は平年並と予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 今後の飛来状況に注意する。
イ 飛来状況は、病害虫防除所の発生予察情報、ホームページを参照。

5 トビイロウンカ

- (1) 予報の内容
ア 発生時期：平年・前年並
イ 発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 県内各地の予察灯及びネットトラップでは飛来を確認していない。
イ 6月5半旬調査の結果、本田での発生も認められなかった。
ウ 気象予報では7月の平均気温は平年並と予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 今後の飛来状況に注意する。
イ 飛来状況は、病害虫防除所の発生予察情報、ホームページを参照。

6 コブノメイガ

- (1) 予報の内容
ア 発生時期：平年・前年並
イ 発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 県内各地の予察灯及びネットトラップでは飛来を確認していない。
イ 6月5半旬調査の結果、本田での発生も認められなかった。
ウ 気象予報では7月の平均気温は平年並と予想されている。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 今後の飛来状況に注意する。
イ 飛来状況は、病害虫防除所の発生予察情報、ホームページを参照。

【果 樹】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	並 並	並 並
ナシ	ナシヒメシンクイ ハダニ類	並 並	並 並
ブドウ	べと病	やや多い	並
カキ	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少ない 並 やや多い やや多い	並 並 やや多い 並
イチジク	アザミウマ類	多い	多い
ナシ、カキ	カメムシ類	少ない	少ない

【果 樹】

1 カンキツの黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病果率は0.1%（平年：0.2%、前年：0.3%）、発生ほ場率は10.5%（平年：5.3%、前年：15%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源の枯れ枝を極力除去する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mmを目安に降雨の合間をぬって薬剤散布を行う。

2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生葉率は8.4%（平年：13.9%、前年：32.0%）、発生ほ場率は50.0%（平年：50.3%、前年：65.0%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤が、葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ ミカンハダニの薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布をひかえ、異なる系統の薬剤をローテーション使用する。

3 ナシのナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年並

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる第1世代成虫の発蛾最盛期は、平坦地域で5月6半旬、山間地域で6月1～2半旬頃であり、平年並であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で6月6半旬、山間地域で7月1～2半旬頃と予想される。

イ 発蛾最盛期7日後を目安に防除を行う。なお、発蛾最盛期を過ぎても成虫が減少しない場合は、更に7～10日間隔で追加防除を行う。

ウ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるように散布する。

エ 交信攪乱剤を使用する場合は、傾斜地ほ場や小面積では効果が低下するので注意する。

4 ナシのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生葉率は1.7%（平年：1.9%、前年：1.7%）、発生ほ場率は25.0%（平年：28.3%、前年：53.3%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤が、葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ ハダニの薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布をひかえ、異なる系統の薬剤をローテーション使用する。

5 ブドウのべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生葉率は0.9%（平年：0.4%、前年：0.8%）、発生ほ場率は35.7%（平年：14.2%、前年：21.4%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期に低温で雨が続くと多発しやすく、発病後の防除効果が低いため予防散布を徹底する。

イ 罹病葉は感染源となるので極力除去する。

6 カキの炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病枝率は0.4%（平年：1.3%、前年

： 0 . 2 %)、発生ほ場率は 2 5 . 0 % (平年： 2 7 . 6 %、前年： 1 7 . 6 %)であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹冠内部の徒長枝に発病しやすいので、防除にあたっては薬液が樹冠内部にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので極力除去する。

7 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生果率は 7 . 1 % (平年： 4 . 9 %、前年： 8 . 8 %)、発生ほ場率は 6 2 . 5 % (平年： 4 6 . 0 %、前年： 7 0 . 6 %)であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月中下旬に防除を実施していないほ場では、早急に防除を行う。

イ 本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などの薬剤がかかり難い箇所によく寄生しているので、散布むらのないよう丁寧に防除する。

8 イチジクのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年 (前 9 か年平均) より多く、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 県農業総合試験場豊前分場に設置した誘引剤での6月1半旬から5半旬までの誘殺虫数は、6 8 4 0 頭 (9 か年平均： 2 , 8 8 0 頭、前年： 4 , 5 3 5 頭) であったが、6月4半旬から5半旬での誘殺虫数は 5 , 4 5 5 頭 (9 か年平均： 1 , 8 2 0 頭、前年： 2 , 3 0 0 頭) と、増加している。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 園地周辺の畦畔等で、6～8月に開花する雑草に発生するので除草に努める。

イ アルミ蒸着フィルム混紡ネットは、侵入が抑制されるので活用する。

9 ナシ、カキ、カンキツ等のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

発生時期：越冬量と今年のスギ及びヒノキの球果の結実状況から、本年の発生パターンは後期発生型 (8月～10月) になるものと予想される。

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～6月5半旬までの予察灯での総誘殺虫数は次のとおりである。(調査地点：筑紫野市吉木)

チャバネアオカメムシ 2 4 頭 (平年： 3 , 2 9 2 頭、
前年： 1 6 , 2 8 4 頭)

ツヤアオカメムシ 5 0 頭 (平年： 2 , 0 2 7 頭、
前年： 1 5 , 2 9 8 頭)

イ 4月1半旬～6月5半旬までの集合フェロモントラップでの総誘殺虫

数は次のとおりである。(調査地点：筑紫野市吉木)

チャバネアオカメムシ 341頭(前6か年平均：5,314頭、
前年：24,525頭)

ツヤアオカメムシ 45頭(前6か年平均：1,555頭、
前年：6,981頭)

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 大半のほ場では、現在防除は必要ないが、毎年発生が多いほ場では、今後の発生状況に十分注意する。

イ 品目によって使用できる薬剤が異なるので、防除薬剤については「平成15年度果樹病害虫防除基準」を参照する。

ウ 合成ピレスロイド系薬剤を多用するとカイガラムシ類やハダニ類が多発する恐れがあるので注意する。

【茶】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
茶	炭疽病 輪斑病 チャノコカクモンハマキ カンザワハダニ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	並 並 並 少ない やや多い 並 やや多い	並 並 並 やや少ない やや多い 並 並

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年並で、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、1m²当たり病葉数は平均0.5葉(平年:0.4葉、前年:0.03葉)であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 摘採残葉での発生に注意し、萌芽から3葉期までに薬剤防除を実施する。特に最終摘採後の芽は、来年の一番茶の母枝葉になるので、防除を徹底する。

イ 防除薬剤は「平成15年度茶・いぐさ病虫害防除基準」を参照し、本病害の薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、複数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う(この項は以下の病虫害についても同様)。

2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生葉率は1.5%(平年:5.5%、前年:7.2%)であった。50葉当たり虫数は平均1.0頭(平年:12.5頭、前年:25.5頭)であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が確認されていない茶園もあるが、発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

3 チャノホソガ

(1) 予報の内容

ア 発生時期 : 平年並で、前年よりやや遅い

イ 発生量 : 平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、1m²当り巻葉数は平均5.5葉(平年:1.1葉、前年:0.3葉)で、特に山間地域で発生が多かった。

イ 黒木町（農総試八女分場）のフェロモントラップによる6月5半旬までの累計誘殺虫数は、546頭（平年：1,019頭、前年：769頭）で、第1世代成虫の発蛾最盛期は平年並の6月1半旬であった。

ウ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、黒木町で7月1～2半旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し発蛾最盛期の7日後に防除を行う。

イ 発蛾最盛期と一葉開葉期が一致する園は、特に発生が多くなるので注意し、巻葉が見え始めたら直ちに防除を行う。

4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬のたたき落とし法による調査の結果、発生量は平均0.5頭（平年：0.5頭、前年：1.1頭）の発生であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

発生状況をよく観察し、たたき落とし法（A4版白紙上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬のたたき落とし法による調査では、平均7.1頭（平年：5.0頭、前年：9.6頭）、発生ほ場率は、95.8%（前年：92.0%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ほとんどの茶園で発生しているので、たたき落とし法（A4版白紙上）で発生量を調べ、10頭以上発生している場合は防除を行う。

【野 菜】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
イチゴ (育苗床)	うどんこ病 炭疽病	並 並	並 並
アスパラガス	斑点病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類 ヨトウ・タバコガ類	少ない 並 並 並 並	少ない 並 並 並 並
ネギ	シロイチモジヨトウ	やや少ない	やや少ない

はフェロモントラップによる誘殺虫数である。

1 イチゴのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、子株での発病株率は26.4%（平年：45.2%、前年：13.5%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ばでの発病は発病（保菌）苗の持込みによるので、育苗期の防除を徹底し健全苗の確保に努める。

イ 上位葉への感染を防ぐとともに、薬剤の付着をよくするため可能な限り下葉を除去する。

ウ うどんこ病菌の薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

2 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生株率は54.4%（平年：43.3%、前年：27.2%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発生後は防除が困難になるので、発生状況に十分注意し、初期防除を徹底する。

イ アザミウマ類の薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

3 ネギのシロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 朝倉町長湊の6月2半旬～5半旬のフェロモントラップによる誘殺虫数は29頭（平年：54.6頭、前年：92頭）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温及び降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

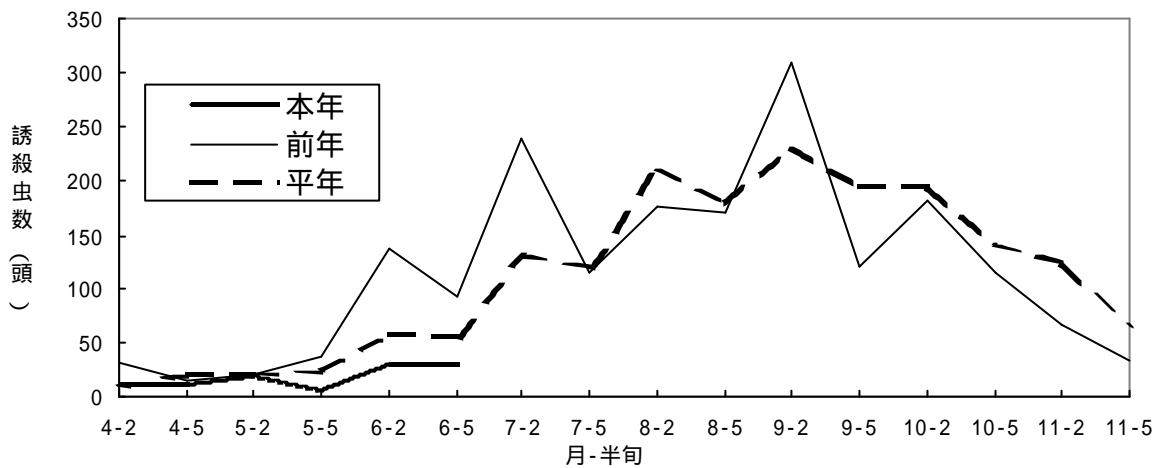
ア 本年は、誘殺虫数が平年より少なく推移しているが、今後の発生動向には注意が必要である。

イ 中齢以降の幼虫に対しては薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、薬剤防除は孵化直後の幼虫をねらって行う。

ウ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

エ 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫は、葉身内に食入し、内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉を見かけたら、直ちに除去する。

オ シロイチモジヨトウの薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺数の推移 (朝倉町長湊)

7月の気象予報（1か月）

（予報期間 6月28日～7月27日）

2003年6月27日
福岡管区气象台発表

【概要】

向こう1か月の平均気温は平年並、降水量は平年並、日照時間は平年並の可能性が大きいでしょう。

九州北部地方では、天気は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

【要素別確率】 (単位%)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

- < 1週目の予報 > 6月28日～7月4日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 2週目の予報 > 7月5日～7月11日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 3～4週目の予報 > 7月12日～7月25日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。

参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3～4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温()		
平均気温()	降水量(mm)	日照時間(h)	1週目	2週目	3-4週目
26.5	285.8	165.5	23.6	24.8	26.5

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページでお知らせしています。アドレス及び番号は下記の通りです。

ホームページアドレス
電子メールアドレス

<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
kfok0301@sp.jppn.ne.jp